



Title	江戸時代における新宮（熊野速玉大社）の神宝伝世の 一様相：西尾市岩瀬文庫とベルリン国立図書館所蔵 の神宝図から
Author(s)	原田，直輝
Citation	フィロカリア．2026，43，p. 81-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104651
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

江戸時代における新宮（熊野速玉大社）の神宝伝世の様相

―西尾市岩瀬文庫とベルリン国立図書館所蔵の神宝図から―

原 田 直 輝

目次

はじめに

一 研究史と問題の所在

二 岩瀬文庫本とベルリン本

三 両本にみる神宝伝世の様相
おわりに

はじめに

和歌山県南東部、熊野川の河口付近に鎮座する熊野速玉大社（新宮）には、現在約一〇〇〇点にのぼる古神宝類が伝来する。摂社の阿須賀神社に伝来した古神宝類（現・京都国立博物館所蔵^①）とともに、多くが明德元年（一三九〇）の奉納品とされ、中世工芸史上の一大基準作として高く評価されている。

両社の古神宝類の研究は、これまで神宝目録との比較検討に多く

を負ってきたが、神宝目録だけでは明らかにできない点も多く、なお研究上の課題は多い。本稿では、研究上の情報の不足を補いうる資料として、西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」（以下、岩瀬文庫本）とベルリン国立図書館（Staatsbibliothek zu Berlin）所蔵「中御前速霊宮（仮題）」（以下、ベルリン本）をあげる。二つの資料は、もと一具とみられ、都合七卷、三〇〇件余りの神宝について記したものである。これらは、従来知られていなかった古神宝類の側面を明らかにしうる資料として貴重であるが、在外資料を含むこともあり、これまで掲載内容や一具性などの検討がなされてこなかった。

本稿では、岩瀬文庫本とベルリン本について、内容と関連情報を整理し、もと一具であったことを示す。また、具体例を挙げながらその資料的意義を確認し、古神宝類研究の上で有用な資料として位置付ける。

一 研究史と問題の所在

(1) 熊野速玉大社の古神宝類

一般に古神宝類とは、遷宮などに際して祭神へ奉納された御料や装束の類である神宝のうち、神殿から下げられた神宝のことをいう^②。本稿にて取り上げる熊野速玉大社と摂社阿須賀神社には、あわせて一〇〇〇点を超える古神宝類が伝来し、前者は同社に、後者は京都国立博物館に所蔵されている。

両社の古神宝類には、武具や紡績具、鏡など祭祀的性格の強いものから、服飾具や室内調度といった神殿での神々の生活を想定したものまで、多岐にわたる品々が含まれる。この古神宝類の歴史的意義を裏付けるのが、神宝目録である。両社伝来の古神宝類に関わる神宝目録としてはこれまで複数が紹介されているが、特に「熊野山新宮神宝目録」と「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」^③（ともに熊野速玉大社蔵）の二点が、研究の上で重要視されてきた^④。前者は、遷宮の行われた明德元年（一三九〇）の本奥書をもつ神宝目録の写し、後者も内容から同年の神宝目録の写しとみられている。両目録には現存する古神宝類と対応する記述が多く、古神宝類の多くが明德元年の奉納であることを示している^⑤。加えて両目録によれば、各神宝の奉納先も明らかにになる。新宮には熊野十二所権現（結宮、速玉宮、証誠殿、若宮、禪師宮、聖宮、子守宮、一万十万宮、勧請十五所宮、飛行夜叉宮、米持金剛王子）、阿須賀社には阿須賀

宮がそれぞれ祀られ、明德元年には各神に対して一揃いの神宝が納められた。両目録では、神宝が奉納先の社殿ごとに分けて記載されているため、各神宝の奉納先も明らかにになる。さらに、奉納には天皇、上皇、室町幕府將軍、諸国の守護が関わったことが関連資料「熊野山新宮惣神官等重訴状案」^⑥（熊野速玉大社蔵）からわかり、奉納にあたっては工芸技術の粋が尽くされたことがうかがえる。

熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類は、すぐれた質と量に加え、以上のような関連資料の存在により、奉納時期や奉納先、調進の主体などが明らかになるのである。両社伝来の古神宝類は、明治三十三年（一九〇〇）には一部が古社寺保存法下の国宝指定を受け、昭和三十一年（一九五五）に文化財保護法下の国宝指定を受けたことに象徴されるように、近現代にかけて、中世工芸史上の基準作として高い評価を得てきた。

(2) 研究史

熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類に関する研究史において、最も大きな要素を占めるのが、先述した「熊野山新宮神宝目録」をはじめとする神宝目録との比較検討である。近代においては、大正一〇年（一九二一）の『東京美術学校工芸史研究部研究報告第一輯 手筈と櫓扇』^⑦において既に「熊野山新宮神宝目録」の翻刻が掲載されている。戦後になると、鈴木敬三氏らが現存する古神宝類の総覧や「熊野山新宮神宝目録」「熊野山新宮御神宝内外御装束之

事御調進造替之文御目録」との比較検討を行って研究の基礎を作り、平成一七年（二〇〇五）には和歌山県立博物館の特別展『熊野速玉大社の名宝―新宮の歴史とともに―』において、両目録をよりどころとしたさらに詳細な検討が行われ、現在の研究の基礎となっている。それらと並行して、古神宝全体を見渡す視点からの研究や、個別の研究分野から作品の位置づけを試みる研究がなされている。^{⑧⑨⑩⑪}

（3）問題の所在

このように注目を集める熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類であるが、依然として研究上の課題は多い。前項で述べたように、神宝目録を基礎とした研究が中心となっているために、それらの語りえない部分が不明点として残るのである。ここでは、本稿に関連する課題として、神宝目録の資料性、神宝目録の記述と齟齬のある古神宝類の位置づけ、奉納後の状況の三点を挙げる。

第一に、研究上の基礎となっている神宝目録の資料性が不明瞭なことである。明徳元年当時に記された神宝目録そのものは残っており、現在知られる神宝目録は、いずれも写本または近代のものであり、研究上の基礎資料とされる「熊野山新宮神宝目録」についても内容の整理された感があるとの指摘もある。^⑫ 神宝目録の資料性、そしてそれらに基づく古神宝類の検討については、なお関連資料による裏付けが求められている。

第二に、神宝目録の記述と齟齬のある古神宝類の位置づけが不明

瞭であることである。伝来の古神宝類のうち、「熊野山新宮神宝目録」「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」の記述と一致するものは明徳元年の制作とみなされるが、神宝目録に記載がないが現存する例や、記載があるが現存しない例も少なくない。前者については、追加調進とする見方が多いものの、位置づけは不明瞭である。後者については、神宝目録の記述以外の手がかりが限られており、新たな資料なくして研究は進みづらい。

第三に、神宝の奉納後の伝世状況についても不明点が多いことである。明治一六年（一八八三）の大火以降の状況については比較的良好に知られるが、それ以前の状況は十分に解明されていない。神宝目録のうち『紀伊統風土記』^⑬に掲載される「当時神宝目録」^⑭などが手がかりとされるが、相互に裏付ける資料に乏しく、近年の研究において言及されることは少ない。

これら三つの点について、神宝目録のみによって明らかにすることは難しい。これらの課題は、神宝目録と古神宝類の他、諸資料から関連情報を抽出し、総合的に検討していくべきものといえ、さらなる関連資料の発見と紹介が求められているのである。

（4）本稿の目的

本稿の目的は、熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類の研究において、従来把握しきれなかった領域を補う資料として、西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」^⑮（岩瀬文庫本）と、ベルリン国立図書館所蔵

「中御前速靈宮（仮題¹⁷）」（ベルリン本）を取り上げ、その内容と意義を明らかにすることである。

これまで紹介されてきた新宮の神宝図としては、写本の多く作られた享保一九年（一七三四）の本奥書を持つ「熊野新宮神宝図」¹⁸（和歌山県立博物館ほか蔵。以下、諸写本も含め「高橋本」と総称する）と、明治三〇年（一八九七）の奉納銘のある包紙を伴う「熊野新宮神宝図」¹⁹（熊野速玉大社蔵。以下、「速玉本」と呼ぶ）がある。これらについては、かねてから往時の神宝の姿や安置状況を残したものと評されてきた²⁰。筆者は、先年、高橋本の関連情報や諸写本について整理し、現存しない資料の情報が多く掲載されていることや、神宝が当時社殿へ安置され、調査の時のみ取り出されたことなどを指摘し、改めてその資料性の高さと広がりを示した²¹。神宝図は、新宮の場合は奉納後に制作された資料であるため、一次資料にはなりえないが、前項で述べた課題に対して効果的な補助資料となりうるのである。

岩瀬文庫本とベルリン本は、新宮と阿須賀社に祀られる一三の社殿それぞれにあてられた神宝の情報を、都合七巻、三〇〇件余りにわたって掲載した資料で、これまで紹介されてきた高橋本と速玉本とは異なる系統の新宮の神宝図である。しかし、両本の掲載内容の検討や紹介は十分になされておらず、特にベルリン本は、在外資料であることもあって国内ではほぼ知られていない。まずは、両本の記載内容や成立経緯などを可能な限り明らかにし、研究の俎上に載せることが求められる。

第二章では、岩瀬文庫本とベルリン本の概要、掲載内容、両本の一具性、伝来、成立について整理し、両本が江戸時代における新宮の神宝の状況を伝える、もと一具の資料であることを示す。第三章では、両本に記される具体的事例をいくつか挙げ、資料的意義を示す。本稿を通じて、岩瀬文庫本とベルリン本を、熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類の研究における重要な資料であると位置付けたい。

一 岩瀬文庫本とベルリン本

本章では、岩瀬文庫本とベルリン本について、概要や掲載内容を整理し、両本の一具性を確認する。また、制作過程や伝来、内容の時期について整理する。

（1）岩瀬文庫本

（i）岩瀬文庫本の概要

「有職図」は、西尾市岩瀬文庫所蔵、六巻からなる資料である。本品の概要について、同館の古典籍書誌データベースにて詳細な解説がある²²。まずは、それに従って本品の概要を述べる。

六巻いずれも、おおむね縦二七～二八cm、横三五～四〇cmの紙を継いだ図巻で、裏打はなく、表紙は卵色の和紙が使われている。各巻それぞれには、岩瀬文庫の館蔵番号として一から六の番号が振られる（以下、岩瀬文庫本各巻について述べるときは、この番号によって

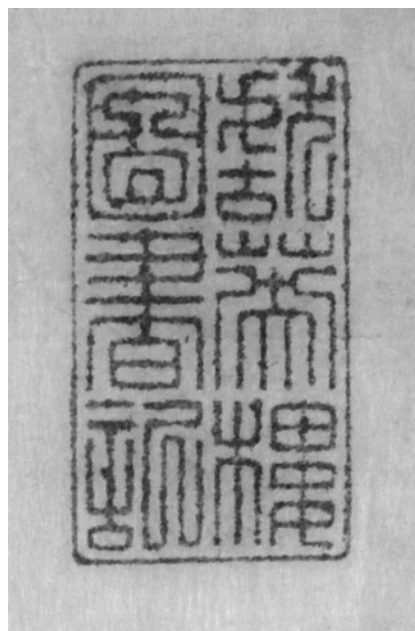
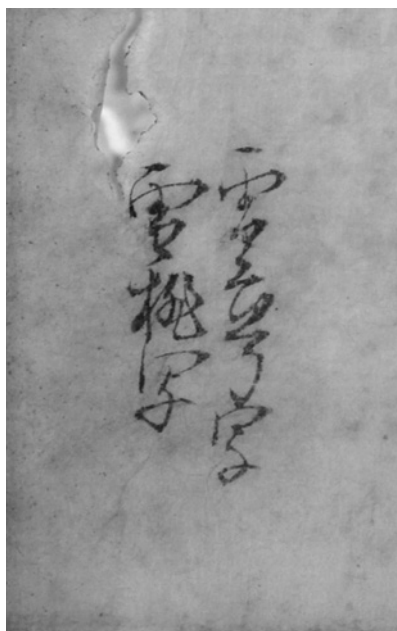
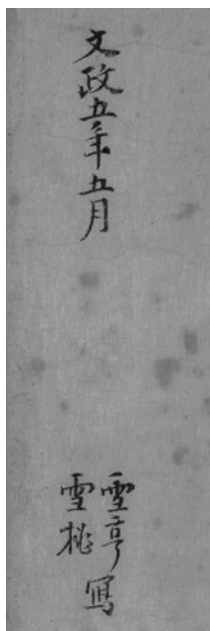
「第〇巻」と表記する。巻頭の欠失した第四巻を除くすべての巻の巻頭には、「猷英楼図書記」朱文長方印（挿図二）と岩瀬文庫の蔵書印「岩瀬文庫」朱文長方印が捺される。第二巻中に「文政五年五月雪亭 雪桃 寫」、第三巻末に「雪亭写 雪桃写」との書入があり（挿図二・三）、田安家お抱え絵師の河島雪亭と雪桃によって、文政五年（一八三二）に制作されたとみられている。

岩瀬文庫本は、「文政年間における熊野速玉大社の御装束神宝の状況が窺える貴重な資料」などと評価されるが、掲載内容については「末社の飛鳥荒祭宮により熊野速玉大社（熊野新宮）の神宝と推定」などあるように推定にとどめられ、制作背景なども明らかでない。まず、岩瀬文庫本が新宮の神宝を描いた絵図であることを確認し、制作者や伝来などの関連情報を可能な限り整理することが求められる。

（ii）記録方法と内容

まずは、岩瀬文庫本が新宮の神宝図であることを、掲載内容を整理しつつ確認したい。掲載内容については岩瀬文庫のデータベースに記載はあるものの、一部項目や詳細を欠いているため、本稿では改めて表一（末尾に掲載）にまとめた。以後、岩瀬文庫本掲載の記述および図について言及するときは、【一】内に表一の「番号」を付記する。

岩瀬文庫本では、冒頭を欠く第四巻を除いて、神宝について記す



挿図一（右）「猷英楼図書記」印（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第一巻 巻頭）
 挿図二（中）河島雪亭・雪桃署名（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第二巻 巻中）
 挿図三（左）河島雪亭・雪桃署名（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第三巻 巻末）

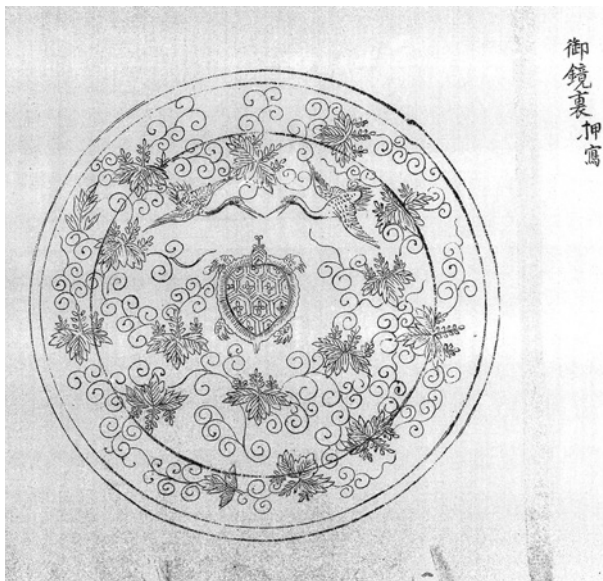
前に、その後に続く神宝の奉納先とみられる社殿名が記されている。第一巻には「西御前結霊宮」、第二巻には「禪地御宮」、第三巻には「聖御宮」「児御宮」「子守御宮」「一万十万御宮」「勸請御宮」「飛行御宮」「米持御宮」、第五巻には「飛鳥荒祭宮」、第六巻には「若宮殿」とある。これらは、先述した熊野十二所権現と摂社阿須賀宮のうち、速玉宮と証誠殿を除く一一の神々と対応する。各神宝の前には、「御調度」「御神服」「御束帯」などと神宝目録上の分類を記す場合があり、「目録ノ外」として神宝目録に記載されないものを記す場合もある。

各神宝の記録は、神宝の名称、員数、意匠、技法などについて、神宝目録の記述を引用して記すことを基本の形とする。神宝の名称以下神宝目録の記述は、「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」または「新宮御神宝目録」⁽²⁵⁾（内閣文庫ほか蔵）に近く、両目録に近い異なる写本を引用したものとみられる⁽²⁶⁾。

多くの項目には図が添えられる。着色、白描のものが混在し、寸法を併記するものもある。着色の図については、朱色・黄土色・緑色・白色のほか、鮮やかな桃色や藍色などの顔料・染料が確認されるほか、金銀泥や胡粉盛り上げも用いられる。例えば、第四巻に描かれる「桐蒔絵手箱」【4—15、巻末図一】をみると、蓋甲を黒塗りとし、桐の文様と錫縁部は、胡粉を盛り上げて金銀泥を付し、蒔絵や錫縁といった金属由来の装飾の質感と量感を巧みに表す。白描の図としては、「押寫」と付記される実寸大の描写が特徴的である。

例えば「鏡」【1—8】⁽²⁷⁾（挿図四）では直径約二〇cmの鏡をおおむね法量通りに記録する。いずれも宝物図らしく、神宝の質感や大きさなどを伝えんとする描写といえよう。

神宝目録の記述と図、という基本的な要素に加えて、各神宝について種々の注記が付される。第一に、神宝目録の記載内容と調査した神宝との相違についての注記である。例えば、第二巻、禪師宮に奉納された手箱【2—10】を見ると、神宝目録に「紋牡丹」とあることに対し、「但御紋牡丹ト御座候得共唐花ト相見エ申候」と補足



挿図四 「御鏡」図
（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第一巻のうち）

されており、神宝目録によれば牡丹文の手箱が奉納されているはずが、禪師宮には唐花文の手箱があった旨を付記している。第二に、所在と状態を記録する注記である。図や項目名の周囲に、朱字で「闕失」「見エ不申候」「損在」などと書かれるものは、ある時点における欠失や損傷を表しているとみられる。表一をみると、「闕失」「見エ不申候」とあるものは、現存する古神宝類のうちに確認されないものがほとんどである。なお、それら欠失の情報のないものについては、大部分が現存する古神宝類と関連しうる記述である^{②⑧}（表一、「相当しうる現存の古神宝類」列を参照。第三に、「ア」などカタカナや五〇音を示す漢字を朱書で付すものがある。意味は不明であるが、同種同装飾の神宝を区別するための記号であった可能性などが想像される。^{②⑨}）

さて、冒頭部分を欠く第四巻は、奉納先の社殿名が不明であった。同巻に記される手箱【4―15】の目録の引用には「溶懸地蒔繪銀螺鈿文桐唐草…」とあり、これは「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調査進造替之文御目録」にみる証誠殿へ奉納された手箱の意匠と一致する。他の奉納品についても、服飾品として束帯が含まれることなどおおむね違和感はなく、第四巻は、証誠殿へ奉納された神宝の記録と判断される。

以上、岩瀬文庫本が新宮の神宝図であるかをめぐっては、引用される目録が新宮の神宝目録と対応すること、表一にみるように現存する古神宝類と多くが一致すること、「闕失」とある神宝の多くが

残っていないことなどを確認した。

これらに加え、個別事例として、各宮へ一合ずつ納められた手箱について確認しておきたい。手箱については、「熊野山新宮神宝目録」「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調査進造替之文御目録」に文様や奉納先が明記される。手箱の意匠は奉納先によって異なっており、かつ一三合すべてが現存するため、記載内容との比較検討がしやすい事例である^{③⑩}。岩瀬文庫本に記載される一一合の手箱の意匠は、桐、松椿、唐花唐草、牡丹、橘、菊唐草、松楓、椰、籬菊である（表二「調査記録」列。第一巻結宮分は手箱部分が欠失している）。これらは、神宝目録にみる各宮あての手箱の意匠と一致する（表二）。先に禪師宮の手箱について述べたように、各手箱の安置先は、引用した目録の記述と異なっていたようだが、目録の引用に見る本来の

【表二】西尾文庫本・ベルリン本にみる手箱の文様

奉納先	目録	調査記録
結宮	桐	桐カ
速玉宮	桐	桐唐草
證誠殿	桐唐草	桐
若宮	菊	松椿
禪師宮	牡丹	唐花唐草
聖宮	橘	牡丹
児宮	菊唐草	唐花唐草
子持宮	唐花唐草	橘
一万十万宮	唐花唐草	菊唐草
勸請宮	椰	松楓
飛行宮	松楓	椰
米持宮	橘	橘
阿須賀宮	松椿	籬菊

岩瀬文庫本とベルリン本に記される、各社殿における手箱の情報を一覧とした。「目録」列には引用された目録の記述にある手箱の文様、「調査記録」列には実際に安置されていたとある手箱の文様を記している。ベルリン本記載の手箱については太字とした。なお、「目録」列にみる文様は、いずれも「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調査進造替之文御目録」の記録と一致する。

奉納先(表二「目録」列)は、熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」の記載と一致する。岩瀬文庫本にみる手箱は、確かに新宮の神々へ納められた手箱を記録しているのである。

紙幅の都合上、すべての要素についての検討について示すには至らないが、以上のことを踏まえ、岩瀬文庫本は、新宮に祀られる熊野十二所権現のうち速玉宮を除く一社と、阿須賀社に祀られる阿須賀宮に納められていた神宝を記録した図巻であると判断してよいであろう。

(2) ベルリン本

岩瀬文庫本において欠失していた部分、すなわち速玉宮分の神宝図を補いうるのが、本項で紹介するベルリン本である。展示履歴や解説のあった岩瀬文庫本とはことなり、ベルリン本は、まとまった紹介はなされてこなかった。ここでは、概要と記載内容をまとめ、岩瀬文庫本との関係性について考察する。

(i) ベルリン本の概要

ベルリン国会図書館所蔵の卷子本一卷(縦二六・五cm、総長二四三・〇cm)である。表紙には青色の紙が貼られている。表紙題簽及び巻頭に「中御前速靈宮」と墨書があり、この墨書によって仮題がつけられている。岩瀬文庫本の例を踏まえると、この「中御前速靈宮」は新宮における第二殿速玉宮を指すと推測される。巻頭に岩瀬

文庫本の多くと同じ「猷英樓圖書記」朱文長方印が捺される。

(ii) ベルリン本の掲載内容

ベルリン本の掲載内容を、岩瀬文庫本の要領にならって表三(末尾に掲載)にまとめた。内容は、件数にして一二件にのぼる。なお、以後、ベルリン本掲載の記述および図について言及するときは、【B—〇】として表三の「番号」を示す。

掲載内容の多くは、「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」に載る速玉宮へ奉納された神宝と一致する。⁽³¹⁾ 目録において束帯や、「御神宝」に分類される武具や馬具が含まれる点も齟齬はない。個別の事例を挙げると、巻頭に記される「御柄」の次に、熊野速玉大社伝来の「金銀装鳥頸太刀」の姿を細緻に写した図があるが【B—2】、ここに描かれる熊野速玉大社伝来の「金銀装鳥頸太刀」については、管見の限り他社の神宝に類例がない。この鳥頸太刀の図は、ベルリン本の記載内容を新宮、速玉宮の神宝と判断するに十分な材料といえるであろう。ベルリン本は、新宮に祀られる熊野十二所権現のうち、速玉宮に納められた神宝について記したものと判断される。

(3) 両本の一具性

速玉宮への奉納品を記したベルリン本は、岩瀬文庫本において欠けていた部分を補うものといえる。ここでは、ベルリン本を岩瀬文

庫本と比較し、両本の一具性について確認する。

両本を比較すると、記録方法や、一部に付される朱書注の形式、そして「献英楼図書記」の朱文長方印などの要素は、岩瀬文庫本とベルリン本との間で共通している。ただ、目録部の筆跡や図の画風については、同一の巻の中でも複数の書き手の介在を思わせるため、詳細な比較検討は難しい。

両本の一具性を考えるうえで大きな手がかりとなるのは、前項で確認した手箱の意匠である。ベルリン本では、「御手箱」【B-66】について、目録には「桐立木」文様の手箱とあるが、当時納められていたのは「桐唐草」文様の手箱であったという。「桐立木」文様を納めたという目録の記述は、岩瀬文庫本と同様、「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」にみる速玉宮あての手箱の記述と一致する。そして実際に安置されていた「桐唐草」手箱は、岩瀬文庫本において確認できなかった手箱にあたり、同本の欠を補うのである（表二）。ここではすべての要素について述べることはできないが、蔵書印や形式的特徴の共通性に加え、ベルリン本における社殿や手箱など個別の要素が岩瀬文庫本の欠を補っていることを鑑みると、両本は、もと一具であったとみてよいであろう。

岩瀬文庫本とベルリン本を一具の資料とみると、部分的な欠失はあるにせよ、これまで知られていた新宮の神宝図のなかでは唯一、新宮と阿須賀社の一三殿に納められた神宝に関する情報を閲覧することのできる資料となるのである。

（4）制作者と伝来

前項では、岩瀬文庫本とベルリン本がもと一具の資料であったと結論付けた。ここでは、両本を一具の資料と見たうえで、記載内容中にみられる制作者や伝来過程を示す記録について整理し、資料の性格や、不整合がないかを確認する。

（i）絵師河島雪亭と雪桃

先に触れた通り、岩瀬文庫本には、第二巻中に「文政五年五月雪亭 雪桃 寫」、第三巻末に「雪亭写 雪桃写」と書人がある（ベルリン本にはこのような書人はない）。これらに信を置けば、両本の制作は、文政五年（一八二二）に絵師「雪亭」と「雪桃」によってなされたと思定される。

このことについては、岩瀬文庫古典籍データベースの解説に指摘があるので、まずはそれに従って確認する。ここでは、「雪亭」「雪桃」を、田安德川家のお抱え絵師であった河島雪亭と雪桃であるとし、『武鑑』の記述を確認する。『武鑑』を順にみると、雪亭は享和元年（一八〇〇）版に、雪桃は文政二年（一八二九）版に初めて現れ、天保六年版には雪亭が、翌天保七年版は雪桃が削除される。⁽³³⁾

雪亭については、溪斎英泉（一七九一～一八四八）による『無名翁随筆』の後藤茂右衛門条をみると、「川島雪亭」について「田安侯の画師なり、雪舟画孫なり、雪舟と少し異なれども名手也、寛政頃

より天保の今に至て存す、市ヶ谷に住す⁽³⁴⁾とあり、他にも江戸時代中後期の漢詩文に名前が認められることが指摘されている。⁽³⁵⁾数少ない文献を確認する限りでは、岩瀬文庫本において、文政五年に両者が名を連ねていることについて、時期的な無理はないといえる。

(ii) 田安家蔵書として

ベルリン本及び岩瀬文庫本の第一、二、三、五、六巻の巻頭には、いずれも「猷英楼圖書記」印が捺される。このことから、両本は、田安家の旧蔵書であったと推定される。田安德川家の文庫は、田安德川家初代の田安宗武（一七一六～七二）が、父であった江戸幕府八代將軍の徳川吉宗（一六八四～一七五二）から譲られた和漢書を基盤とし、二代の田安治察（一七五三～七四）、三代の田安斉匡（一七七九～一八四八）の時代に拡充された。

「猷英楼圖書記」印については、斉匡が「猷英楼」を号とし、斉匡治世下の写本に「猷英楼圖書記」印の捺される例が多いことなどから、斉匡の治世における蔵書印とする説がある。⁽³⁶⁾また、斉匡は、寛政七年（一七九五）から文政五年（一八二二）にかけて、各家の蔵書目録を蒐集し、書籍の謄写を進めたとされる。⁽³⁷⁾岩瀬文庫本にみる文政五年の年紀は、このような斉匡の動向と矛盾しない。両本の内容が実地調査によるものか、既にあった資料を写したものかは定かではないが、前者であれば宗武以来の服飾や有職文物への関心によるもの、後者であれば斉匡の書写事業の一環と捉えられる。いずれ

にせよ、文政五年頃の制作とされる本資料は、斉匡の動向と照らしても違和感はなく、また前項で確認した田安家お抱え絵師の河島雪亭と雪桃の制作という点とも矛盾しない。両本は、斉匡の治世に、先述したいずれかの意図のもと制作され、そのまま田安家の文庫に納められたものと考えられる。

(iii) 明治期以降の伝来

つづいて、岩瀬文庫本とベルリン本が田安家から流出し、現在の所蔵に至った経緯を確認する。岩瀬文庫本は、同文庫の『図書原帳』（西尾市岩瀬文庫蔵）により、明治四三年（一九一）一〇月二四日に同文庫の所蔵となったことが知られる。⁽³⁸⁾一方、ベルリン本は、フリッツ・ルンプ（一八八八～一九四九）の旧蔵品で、他の旧蔵書とあわせて一九八〇年に同館の所蔵となったというが、それまでの経緯は明らかでない。⁽³⁹⁾岩瀬文庫の『図書原帳』によれば、明治四三年に岩瀬文庫へ入った時点で「有職図」は六巻であったといい、同年までにベルリン本が離れていたことは確かである。したがって、両本は、いずれも明治期に田安家から流出し、その過程で行き別れとなり、岩瀬文庫とルンプのもとに渡ったと推測される。松方冬子氏は、田安家の蔵書の流出が遅くとも明治一〇年頃には始まると指摘しており、岩瀬文庫本とベルリン本の伝来についても、そのような蔵書流出の一環と考えるのが妥当であろう。⁽⁴⁰⁾

この両本の伝来は、田安家旧蔵「猷英楼画叢」（東京国立博物館は

か蔵」の事例とも通じる。「猷英楼画叢」は、能面、能装束、能小道具などを模写した画帖で、田安家の命によって文政から天保年間に制作されたとされ、東京国立博物館所蔵の一三帖、ピエール・クレットマン氏所蔵の四帖、ボストン美術館の一帖が知られている。⁽⁴¹⁾長崎巖氏は、このうちクレットマン氏所蔵本について、お雇い外国人ルイ・クレットマン（一八五一―一九一四）が日本に滞在した明治九年（一八七六）から同一二年の間に入手したものとし、「猷英楼画叢」はこの段階ですでに田安家から流出、行き別れとなり、国内外に分蔵されるに至ったとする。この「猷英楼画叢」の例を踏まえると、岩瀬文庫本とベルリン本が、明治期に田安家から流出、その後複数に分かれて国内外に伝来したという経緯は特異な事ではなく、むしろ同時代の田安家蔵書流出の一つの類型とも位置付けられよう。⁽⁴²⁾以上、絵師河島雪亭と雪桃、一九世紀初頭の田安家の動向、明治時代以降の蔵書の流出について確認した。河島雪亭と雪桃の動向について不明な点が残るが、制作の経緯や伝来について、大きく不自然な点は見当たらない。

（５）制作過程

前項において、岩瀬文庫本とベルリン本の制作者や伝来について確認したが、両本の制作過程については、留意すべき点が残る。ここでは、両本の制作過程にまつわる二つの問題を確認する。すなわち、記載内容が調査成果と既存資料の写しのいずれであるのかとい

う問題と、目録などの記載内容がいつの段階のものであるのか、という問題である。

第一に、両本が、実地調査の成果を記したものであるのか、それとも別の図巻を写したものであるのか、という問題である。岩瀬文庫本については、「当時の当主は第三代斉匡で、その命により実地に調査を行った報告書らしい」⁽⁴³⁾「文政年間における熊野速玉大社の御装束神宝の状況が窺える貴重な資料」などとの指摘がある。新宮の宝物調査とみなすことのできる同時代の記録は、管見の限り二点である。すなわち、『熊野年代記』と高橋本の本奥書にみる、享保一九年（一七三四）と元文二年（一七三七）の徳川吉宗の命による調査、そして寛政八年（一七九六）に谷文晁（一七六三―一八六二）⁽⁴⁴⁾が新宮を訪れたとみられる『文晁過眼録』の記録である。⁽⁴⁵⁾文晁の調査は、松平定信（一七五九―一八二九）の『集古十種』にかかわるもので、田安家事業との関連が想定されるが、現段階では両者を紐づける資料はない。新宮での調査内容は不明で、本図の制作まで二六年の開きがある点も留意すべきである。

宗匡が同時期に諸家の資料を写させていた事情を考慮すれば、両本が既存資料の写しである可能性も否定できない。この場合、高橋本との関係を想定したいが、この高橋本との関係性も不明である。両資料の間には共通、類似する記述や図がみられる一方、互いに相違点や欠失も認められ、現段階で転写関係については明言できない。⁽⁴⁷⁾岩瀬文庫本とベルリン本が、誰の調査成果であるのか、また高橋本

との関係の有無については、現段階では断定できず、今後さらなる関連資料による検討を待たねばならない。

第二に、図や注記などを含む記載内容が、調査を行った際の神宝の状況を表したものであるかについても、注意が必要である。筆者は、特に「闕失」や「損在」といった注記は、調査時の記録ではなく、制作にあたって引用した神宝目録に付されていた注記を写した可能性が高いと考える。例えばベルリン本の「小轡」【B-16】「大轡」【B-17】については「損在」の朱書注があるが、直後に「見へ不申候」とあり、現物を確認できなかったとわかる。すなわち、事前に「損在」とある目録を写してから調査をし、実情を追記していることになる。逆に、ベルリン本にみる「御錦蓋」【B-28】は「闕失」と注記されつつも「慥ニ御座候」とあり、実際には存在していたとわかる。このような注記と実情との齟齬により、注記が必ずしもすべて当時の記録ではなく、一部は既存の目録からの転写によるものであると推測されるのである。すなわち、岩瀬文庫本とベルリン本は、文政五年（一八二二）以前のある時点に、既存の神宝目録を基礎にしつつ調査を行い、調査情報を加筆したものとみなされる。両本に見る神宝の伝世状況について考える際は、このような記録の重層性に留意する必要があるであろう。

両本は、前項でみた制作事情からも、江戸時代、おそらく一八一九世紀の一時点における神宝の情報を伝えるものとひとまず評価される。しかし、本章で確認したような留意点があり、引用された

目録の示す時期や調査の実情、既存資料との転写関係については、引き続き関連資料を搜索する必要がある。

小結

以上の検討から、岩瀬文庫本とベルリン本は、当初一具の資料で、文政五年（一八二二）に田安家お抱え絵師であった河島雪亭と雪桃によって制作され、明治期に田安家から流出して岩瀬文庫とベルリン国立図書館の所蔵になったと考えられる。両本は、江戸時代の一時点における神宝の情報を伝えるものとみられ、熊野十二所権現と阿須賀宮、都合一三所の神々へ奉納された神宝三〇〇件余りに関する情報が収録される。

筆者の力量不足により、両本の制作過程、すなわち実地調査の成果が既存資料からの転写か、という問題を明らかにできなかったことは悔やまれる。また、両本については、注記と本文との時期的な齟齬など留意すべき点もあり、引き続き類品や関連資料を求める必要がある。しかし、両本は、熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類研究において、膨大な情報量を含むきわめて貴重な資料であることは間違いない。高橋本が最大で四七件の神宝の記録を掲載するに過ぎなかったことと比べても、圧倒的な情報量を誇る資料といえるのである。

三 両本にみる神宝伝世の一樣相

神宝図には、現存しない宝物の情報をとどめる、かつての宝物の

状況を示すなどの意義がある。岩瀬文庫本とベルリン本を通覧すると、神宝の保存状況、現存しないあるいは神宝目録に記載されない神宝の情報など、これまで知られていなかった情報を多く見出すことができる。

本章では、両本が新宮の古神宝研究に提供しうる新しい視点について、具体例を交えながら紹介する。紙幅の制約上すべてに触れることはできないが、両本の意義の一端をまとめておきたい。

(1) 神宝の伝世状況

岩瀬文庫本とベルリン本の意義の一つは、項目ごとに「闕失」や「損在」といった注記から、奉納後のある時点における神宝の伝世状況を示している点である。

前述したように、これらの注記は調査時とは異なる時期の残存状況を示すものとみられるが、両本ほど具体的に神宝の伝世状況を示す資料は見当たらない。これまで神宝の伝世状況を伝えるものとして、『紀伊統風土記』に掲載された「当時神宝目録」と、元文二年（一七三七）に宇治田忠郷の写した「新宮御神宝目録」が紹介されてきた。⁴⁸これらの目録と岩瀬文庫本・ベルリン本を比較すると、共通する項目はあるものの、両目録には「闕失」や「損在」などの情報はみられない。例えば、前章で挙げたベルリン本の「小轡」【B-16】「大轡」【B-17】について、両目録には損傷と欠失の記録がないまま立項され、伝世状況の把握はできない。

岩瀬文庫本とベルリン本は、「闕失」や「損在」などの注記によって、前近代における一時点の伝世状況を、これまで知られていなかった目録よりも具体的に示しているのである。

(2) 神宝の保存状態

岩瀬文庫本とベルリン本には、神宝の保存状態を伝える注記や図が含まれる。これらの注などには、現存する古神宝類の状態や関連資料の記述と合致するものもあり、奉納後の神宝の保存状態を知るための手がかりとなる。ここでは例として「冠」と「玉佩」を取り上げ、その意義を確認する。

まず、「冠」は、「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」から速玉宮と阿須賀宮に各一頭奉納されたことが知られ、両社伝来の古神宝類のうちに各一頭、計二頭がある。⁴⁹岩瀬文庫本とベルリン本では、ともに「冠」に「損在」の注を付し、「右御冠損シ御座候テ圖仕難申上御座候」といって、図は記されない【5-1、B-41】。この記載は、明治中期の所蔵品目録という「熊野新宮神宝録」⁵⁰において、阿須賀宮にある「冠」に「ボロく」と注書があること、現存の「冠」二頭ともに後世の修理痕が指摘されていることと一致しており、近世の一時点における保存状態の記録として妥当といえる。

次に、「玉佩」は、明德元年には速玉宮へ二旒が奉納され、熊野速玉大社古神宝類のうちに二旒が含まれる。⁵¹かつて沿っていた箱書

によると、うち白色と桃色の玉は明治期の後補であるというが、実際にベルリン本の図【B—44、巻末図二】には桃色の玉がみられない。岩瀬文庫本とベルリン本の他の箇所では桃色の顔料が使われているため、桃色が使えなかったわけではなく、「損在」の注記とあわせれば、修理前の状態を記録した可能性が高いであろう。

これら二例のように、両本の記録には、現存の古神宝類の修理歴や他資料の記録から裏付けられるものが確認される。両本は、神宝の保存状態を具体的に伝えるものとして重要といえるのである。

(3) 神宝の移動

岩瀬文庫本とベルリン本には、社殿間で神宝が移動したことを具体的に示す記録が含まれている。特に顕著であるのが、一三合の蒔絵手箱である。先述したように、両本に記される手箱の意匠は、「熊野山新宮神宝目録」「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」や、現存する古神宝類と一致する一方で、ほとんどが目録に記された奉納先とは異なる社殿に安置されている（前掲表二）。本資料によって、前近代において手箱の移動があったことが確認されるのである。

ここで、新宮本社内にとどまらず、新宮と阿須賀社との間における神宝の移動が確認されることも見逃せない。目録によると阿須賀宮へは「松椿」文様の手箱が奉納されたとあるが、岩瀬文庫本によれば、阿須賀宮には「籬菊」文様の手箱があり【5—18】、「松椿」

文様の手箱は勧請宮へ移動している【3—5—1】。このような本社摂社間の宝物の移動は、両社間の関係を窺う上でも興味深い。新宮と阿須賀社間における神宝の混乱は、現存する古神宝類のうちにいくつか認められるが、そのほとんどが明治一六年（一八八三）の火災後、阿須賀神社伝来の古神宝類が一時期熊野速玉大社へ預けられていたことに端を発すると指摘されている⁽³⁴⁾。両本の記録は、現状指摘されている事例とは異なり、これまで知られていなかった混乱の記録といえるのである。

(4) 現存していない神宝

神宝図に限らず、寺社宝物図の意義の一つとして、現存しない宝物の情報をとどめるということが挙げられる。岩瀬文庫本とベルリン本にも、そのように現存しない神宝の情報を伝えている事例が散見される。

その一例が、ベルリン本に描かれる「御錦蓋」【B—28、挿図五】である。これは、神宝目録のうち「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」に「御錦蓋一柄 長柄黒漆塗朱ノ差分金銀蒔絵文桐在金銅金物 張赤地錦唐草文色々 金銅ノ鈴 唐綾ノ水引 金糸ノ総唐組緋緒」として記載されるが、実物は現存せず、他に具体的な姿を知るための手がかりもなかった。ベルリン本の図は、その外観を知るうえで、管見の限り唯一の資料となる。

さらに、この「御錦蓋」については、ベルリン本をみると「殊外

損申上候故當時御祭礼ニハ出不申候尤御地唐織上代ノ渡り物ト奉存候」と、損傷が甚だしかったため、「外ニ御蓋一柄御座候是ハ御目録之外ニ御座候ニ付末へ書出シ申候」と、代わりの「御蓋」【B】を用いていたことを記す。この二つの図は、神宝のみならず

【図版はインターネット非公開】

挿図五 「御錦蓋」（ベルリン国立図書館所蔵「中御前速霊宮」のうち）

往時の祭礼の様子をもうかがわせるのである。

両本にみる、現存しない神宝についての図は、従来の資料で知られていなかった神宝の具体像を補うものである。新宮の神宝の全体像を考えるうえで、きわめて貴重といえる。

（5）目録外の神宝

岩瀬文庫本とベルリン本は、既存の神宝目録に記載されない「目録之外」の神宝を数多く収録していることも興味深い。その中には現存する古神宝類に該当するものも含まれ、管見の限り文献上の初出資料として極めて重要である。ここでは、両本において初出となる「目録之外」の神宝について、現存する「衾」と、舶載の織物を使った神宝について記しておく。

まず、熊野速玉大社と阿須賀神社に伝来する「衾」について確認する。「衾」は、二、四幅の染織品で、熊野速玉大社古神宝類のうちに「衾 朽葉地人物花唐草文縹珍」一帖、「衾 白地小葵文固綾」一帖、「衾 黄地浮線綾丸文唐織物」六帖（裏地三種）が、阿須賀神社伝来古神宝類のうちに「衾 白地小葵文浮線綾丸文二重織」一帖、「衾 黄地浮線綾丸文唐織物」一帖が含まれる。これら現存の「衾」に該当する記述は神宝目録には認められず、特に「衾 黄地浮線綾丸文唐織物」について、本来「茵」であった可能性などが指摘される⁽⁵⁵⁾。しかし、これもまた裏付けは十分とはいいがたく、奉納当時の認識や位置づけが不明瞭である。

【図版はインターネット非公開】

挿図七 「国宝 古神宝類のうち衾
黄地浮線綾丸文唐織物」(熊野速玉大社蔵)
裏地部分

【図版はインターネット非公開】

挿図八 「国宝 古神宝類のうち
唐衣 蘇芳地唐草文銀襴」(熊野速玉大社蔵)

【図版はインターネット非公開】

挿図六 「国宝 古神宝類のうち
地浮線綾丸文唐織物」(熊野速玉大社蔵) 表地

【図版はインターネット非公開】

挿図一〇 「国宝 古神宝類のうち
衾 朽葉地唐草人物文縹珍」(熊野速玉大社蔵)

【図版はインターネット非公開】

挿図九 「国宝 古神宝類のうち
袈 蘇芳地小花文銀襴」(熊野速玉大社蔵)

岩瀬文庫本第二巻の「目録之外」項に記載される「御二幅ノ物」【2―39、巻末図三】は、大きさ、表地裏地の文様などが、「袈黄地浮線綾丸文唐織物」のうち裏地が薄紅地松喰鶴丸文のもの【挿図六、七】と一致する。記録当時、「袈黄地浮線綾丸文唐織物」は「御二幅ノ物」とみなされていたようである。

ただし、岩瀬文庫本とベルリン本には、「茵」の情報がなく、両本をみるのみでは、「茵」の記述や画像との比較はできない。すなわち、「御二幅ノ物」がもともと「茵」や「袈」であったのか、もとより「御二幅ノ物」であり両者と別物であったのかまでは判断できず、「茵」とする説の検証には至らない。一方、ベルリン本には、「御二幅ノ物」と類似した装飾の「織物一幅ノ物」【B―112】や、阿須賀神社伝来古神宝類のうち「袈 白小葵地臥蝶丸文二重織」（京都国立博物館蔵）と似た四幅の「御入帷」【B―39】が認められ、現存する「袈」のかつての認識については、やや幅をもって想定する必要があるようである。より解釈の幅を広げてしまうようだが、本図巻の記録は、これまで前近代の情報なかった「袈」の認識について、江戸時代の一時点における認識を示すものとして興味深い。もう一点重要であるのは、舶載の裂を使ったとみられる神宝に関する記録が見られることである。現存する古神宝類のうち、「唐衣蘇芳地唐草文銀欄」【挿図八】、「相 蘇芳地小花文銀欄」【挿図九】、「袈 朽葉地唐草人物文縹珍」【挿図一〇】（いずれも熊野速玉大社蔵）は、いずれも銀欄や縹珍といった舶載の織物を用いたとみられ

る神宝である。これらも「袈」と同様、目録に記述がなく、しばしば追加の調進であるとする意見が述べられてきた。⁽⁸⁾ 岩瀬文庫本の第三巻、米持宮項には、「御唐衣」【3―7―6、巻末図四】、「御薄衣」【3―7―5、巻末図五】、「御二幅ノ物」【3―7―7、巻末図六】が連続して記される。これらの記述は、現存の古神宝類と表地のみならず裏地の文様までも一致し、管見の限りこれら古神宝類の文献上の初出とみられる。いずれも大きく文様を記していることから、記録者が特に興味を抱いてこれらの神宝に臨んだであろうことが想像される。これらが熊野十二所権現の最後にあたる米持宮項の最後にまとめられていることも示唆的で、今後追加調進などの問題を考えるうえで手がかりとなりうる記録といえる。

これら二例のように、岩瀬文庫本とベルリン本は、前近代の目録に記載されない神宝をも網羅的に収録しており、これまで確認されなかった神宝の情報を多く伝えている。両本は、従来手がかりの乏しかった神宝の解釈や伝世過程を考える上で、重要な資料といえるのである。

小結

本章では、岩瀬文庫本とベルリン本が、熊野速玉大社と阿須賀神社伝来の古神宝類の研究において、提供しうる情報について概観した。紙幅の都合上すべてに触れることはかなわないが、ここに挙げた事例を見ると、両本は、新宮の神宝に関する情報を具体的に示しており、その内容については一定の信をおけるとみてよいであろう。

両本は、目録の記載だけでは把握できない神宝の実態を補い、熊野速玉大社と阿須賀神社の古神宝研究に新たな視点を与える、重要な資料と位置づけられるのである。

おわりに

以上、本稿では、岩瀬文庫本とベルリン本の内容や背景について整理し、その資料的意義を示した。両本は、制作経緯などに不明な点が残るものの、江戸時代の一時点における神宝の実態を、図と注記などによって具体的に示しており、神宝目録の示しえない領域を補完しうる資料といえる。両本は、今後新宮の神宝研究のみならず、服飾史や工芸史、大名家のいわゆる好古趣味の研究、近世における神社宝物受容の研究など、多方面に活用されうる資料であると考ええる。

田安家関係の岩瀬文庫本及びベルリン本の存在、そして多くの写本が作られた高橋本を含めると、新宮の神宝を描いた図は、江戸時代中後期の段階においてある程度注目されたと思われる。本稿ではあくまでその一端を提示するにとどまったが、今後、本資料を含む関連資料の総合的な把握を通じて、新宮をはじめとする寺社の宝物そのもののさらなる研究とともに、宝物図が近世の文化や学問において果たした役割を明らかにすることが望まれよう。両本の活用による研究の進展を願って、筆をおくこととした。

【図版出典】

口絵一、三～六、挿図一～四

西尾市岩瀬文庫より提供

口絵二、挿図五

Digital Collection of Staatsbibliothek zu Berlin Workview (https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN346229602&PHYSID=PHYS_0038&DMDID=DMDLOG_0012) より

挿図六、七

和歌山県立博物館『熊野速玉大社の名宝―新宮の歴史とともに―』(二〇〇五)より転載

挿図八、九、一〇

京都国立博物館より提供

【付記】

本稿の執筆に際し、下記の機関・個人からご高配を賜りました。記して御礼申し上げます。

大阪大学人文学研究科 日本・東洋美術史研究室

京都国立博物館 熊野速玉大社 西尾市岩瀬文庫 西尾市教育委員会

和歌山県立博物館 Staatsbibliothek zu Berlin

青木真美 上野顯 門脇むつみ 齋藤風伯 島田和 濱中孝成 藤岡穰

註

- (1) 阿須賀神社伝来の古神宝類は戦後国に払い下げられ、現在は京都国立博物館の所蔵となっている。
- (2) 「神宝」の定義については、関根俊一編『日本の美術五一 古神宝』至文堂 二〇〇八年などに詳しい。管の限り、前近代において熊野速玉大社および阿須賀神社の「神宝」が「古神宝」であったと捉えられる記録は確認されないため、本稿では前近代における神宝について「神宝」、近代以降まで残った神宝について「古神宝(類)」と呼んで区別する。また、同様の事情から、熊野速玉大社を前近代について述べる際は「新宮」、阿須賀神社を「阿須賀社」と呼ぶ。
- (3) 和歌山県立博物館『熊野速玉大社の名宝―新宮の歴史とともに―』二〇〇五年、図版番号三〇。
- (4) 『紀伊統風土記』所載の「当時神宝目録」、明徳元年以前の神宝奉納の記録とされる「熊野山新宮神宝録」、紀伊藩士宇治田忠郷(一六九一―一七四四)が元文二年(一七三七)の調査時に写した「新宮御神宝目録」(内閣文庫ほか蔵)、近代の目録とされる「熊野新宮神宝録」、年代不明の「御宝物并古書類控」が確認されている。いずれも翻刻は、滝川政次郎、村田正志、佐藤虎雄編著『熊野速玉大社古文書古記録』清文堂出版 一九七一年に掲載されている。
- (5) 「金銀装鳥頸太刀」(熊野速玉大社蔵)の刀身(現在は所在不明)の古写真(上野元編『椰の老樹』熊野権現速玉大社 一九五四年、一―三頁の前頁)から、茎に「康応二年(一三九〇)三月日」の年紀銘があったことがわかり、これが「熊野山新宮神宝目録」にみる「明徳元年(一三九〇)十一月日」の年紀と一致することが裏付けとなっている。
- (6) 「熊野山新宮惣神官等重訴状案」(熊野速玉大社蔵)。和歌山県立博物館二〇〇五、展示番号六。
- (7) 東京美術学校工芸美術会一九二一。
- (8) 鈴木敬三「熊野速玉大社の古神宝」『國學院雜誌』六五―一〇・一 一九六四年 四九―七二頁。
- (9) 和歌山県立博物館二〇〇五。
- (10) 関根俊一(二〇〇八)、清水健「神宝より見える、見えない日本の神々の姿」外村中・稲本泰生編『見える』ものや「見えない」ものをあらわす 東アジアの思想・文物・藝術 勉誠社 二〇二四年など。
- (11) 栗原澄子『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』ブレーン出版 二〇〇一年、山川暁「袖 蘇芳唐草文銀欄」『國華』一三七五 二〇一〇年 三―三四頁、久保智康「鏡と鏡箱の関係をさぐる」河上繁樹編『週刊朝日百科 日本の国宝 三九 熊野速玉大社/長保寺/道成寺』朝日新聞社 一九九七年、蒔絵研究会編『手箱』駸々堂出版 一九九九年など。
- (12) 和歌山県立博物館二〇〇五。
- (13) 安永拓世「概説 熊野速玉大社の名宝―古神宝類を中心に―」和歌山県立博物館編『熊野速玉大社の名宝―新宮の歴史とともに―』二〇〇五年 四―八頁など。
- (14) 文化三年(一八〇六)、江戸幕府の命を受けた紀伊藩が、藩学者の仁井田好古(一七七〇―一八四八)らに命じて編纂させた地誌。天保一〇年(一八三九)に完成。
- (15) 滝川政次郎ほか一九七一に翻刻が掲載され、解題にて当時の神宝の残存状況を示したものとわかれる(同二二頁)。
- (16) 西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースに概要や解説等が記載されている(<https://adecac.jp/iwasebunko/catalog/mp02057300>)。最終閲覧日二〇二五年九月二九日。
- (17) ベルリン国立図書館のオンラインデータベースで資料画像を閲覧した(<https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht/?PPN=PPN3346229602>)。最終閲覧日二〇二五年九月二九日。
- (18) 紀伊藩士で有職家の宇治田忠郷の調査成果を、京の有職家高橋宗直が写して成立した。なお、管見の限り最も原本に近いと思われる和歌山県立博物館所蔵本については、拙稿「熊野新宮神宝図」について―成立過程と写本の展開に関する検討―和歌山県立博物館編『和歌山県立博物館 研究紀要』三一 二〇二五年 一七―三四頁に、全巻画像と翻刻を掲載した。

- (19) 和歌山県立博物館二〇〇五、図版番号七九。
- (20) 関保之助「解題 熊野新宮神宝図」『考古』第一編第四号 考古學會 一九〇〇 五二～五三頁、安永拓世「コラム 新収蔵品展(一) 今はわからなくなったこともー熊野新宮神宝図巻一」和歌山県立博物館「博物館ニュース」二〇〇八年二月二〇日アップロード (<http://kenpaknews.blog120.fc2.com/blog-entry-83.html>) 最終閲覧日二〇二五年九月二九日)、高津綾乃「熊野新宮神宝図について」奈良大学大学院編『奈良大学大学院研究年報』二〇一三年 五七～六九頁など。
- (21) 原田直輝二〇二五。
- (22) 前掲注16。
- (23) 熱田神宮宝物館「熊野三山と紀伊半島の神話」二〇二四年 作品番号五一。
- (24) 前掲注16。
- (25) 元文二年(一七三七)、紀伊藩の有職家宇治田忠郷らによって写された目録。滝川政次郎ほか一九七一に翻刻が掲載されるほか、内閣文庫所蔵の写本も同一内容で、画像を同文庫データベースにて確認できる (<https://www.digitalarchives.go.jp/file/1235088.html>) 最終閲覧日二〇二五年九月二九日。
- (26) 高橋本についても同様であり、現状引用元の目録は不明である。
- (27) ただし、このような鏡の図については、「本紙を鏡背面に押し当てた形跡はなく、鏡背図の中央に針の孔痕がみられるものもあり、コンパス状の道具を用いて円を描いたのちに忠実に文様を描きとったと思われる」(熱田神宮宝物館二〇二四)と指摘される通り、実物の法量をとって写し取ったのか、「押寫」した図から写し取ったのかは明らかではない。
- (28) 例外として、手箱関連の品々と「御衣箱」が挙がる。前者は、各宮(手箱)間で行きかっていたと思われ、現在でも同様の混乱が認められる。後者については、両社に「松喰鶴時絵御衣箱」都合五合(熊野速玉大社古神宝類のうちに四合、阿須賀神社伝来の古神宝類のうちに一合)が伝来するにもかかわらず、「闕失」となっている。伝来する

- 「御衣箱」には目録の記述と齟齬があるとの指摘があり、古神宝類の性格を考えるうえで興味深い(和歌山県立博物館二〇〇五)。
- (29) 現存する古神宝類の一部には、近代における文化財整理の中で付されたとみられるイロハの号数を記した紙札等が付されていることが、展示等において確認できる。
- (30) 熊野速玉大社古神宝類のうち「桐時絵手箱」「桐唐草時絵手箱」「雛菊時絵手箱」「牡丹時絵手箱」「橘時絵手箱」「菊唐草時絵手箱」「唐花唐草時絵手箱」「唐花唐草時絵手箱」「柳時絵手箱」「松楓時絵手箱」(以上熊野速玉大社蔵、阿須賀神社伝来古神宝類のうち「松椿時絵手箱」(京都国立博物館蔵)、「橘時絵手箱」(個人蔵)。
- (31) ベルリン本との比較では、巻頭の速玉宮該当部分を欠く「熊野山新宮神宝目録」は参考にならないため、「熊野山新宮御神宝内外御装束之事御調進造替之文御目録」に拠る必要がある。
- (32) 前掲注16。
- (33) 「武鑑全集」(<https://codh.rois.ac.jp/bukan/>) 最終閲覧日二〇二五年九月二九日)を参照した。
- (34) 岩本佐七編『燕石十種』二 国書刊行会 一九〇七所載の翻刻を参照した。
- (35) 杉本欣久「江戸中期の漢詩文にみる画人関係資料―事項一覧編―」黒川古文化研究所編『古文化研究』九 二〇一〇年。
- (36) 鈴木淳「田藩文庫考」国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』青裳堂書店 二〇〇六年。
- (37) 松方冬子「田安德川家蔵書の伝来について」国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』青裳堂書店 二〇〇六年。
- (38) 「圖書原帳」の存在ならびに岩瀬文庫本関連の内容については、西尾市文化財保護課青木真美氏にご教示いただいた。
- (39) ルンプは、ドイツの日本学者、浮世絵研究家。ルンプの旧蔵書の一部は、一九八〇年にベルリン国立図書館にまわって寄贈された(「ベルリン国立図書館蔵日本の卷子本」(<https://themen.crossart.org/japanische-quertrollen/?lang=ja>) 最終閲覧日二〇二五年九月二九日)。

- (40) 松方冬子二〇〇六。
- (41) 東京国立博物館本については長崎巖「東京国立博物館保管『献英楼画叢』について」東京国立博物館[MUSEUM] 五五七 一九九八年三五～五九頁、クレットマン氏所蔵本については西野春雄「コレージュ・ド・フランス寄託『献英楼画叢』稿」法政大学区国際日本学研究センター『国際日本学』三二二〇四年 九三～一〇一頁、ボストン美術館本については長崎巖「新発見資料・ボストン美術館所蔵『献英楼画叢』に関する調査報告」法政大学能楽研究所『能楽研究 能楽研究書紀要』三〇二〇〇六年 一～三八頁に詳しい。
- (42) 長崎巖一九九八。東京国立博物館本は明治四二年（一九〇九）の購入品である。また、同氏は、ボストン美術館本はウィリアム・スタージス・ビゲロウ（一八五〇～一九二六）の旧蔵資料であるとしている（長崎巖二〇〇六）。
- (43) 前掲注16。
- (44) 熱田神宮宝物館二〇二四。
- (45) 享保一九年に「九月、神宮神宝御改役人來」、元文二年に「五月江戸茶屋ノ宗味ニ被仰付三山御神宝書写 若山宇治田平左衛門 京都絵師五月新宮ニ來ル 経所ニテ書 御劔ニ振モ出ス也」とある（熊野三山協議会編『熊野年代記』一九八九年）。
- (46) 「文晁過眼録（十）寛政八年丙辰西遊展観目録」「集古会誌」二 集古会一九一四 七～九頁。「新宮」項は空欄となっており内容については不明。
- (47) 高橋本は、宇治田忠郷が幕府へ提出した調査記録の一部である。すると、河島雪亭らが高橋本の母体となった図巻を写した可能性もあるが、そのもととなった図巻は現状確認できず、比較ができない。
- (48) 前者については「本書の作成された当時、天保年時に於ける熊野山新宮目録であり、その頃の同神宝の状況を知る上に重要と考えられる」、後者は「元文年間における新宮所蔵の御神宝の現状を窺うことができる」と評される（滝川政次郎ほか一九七一、各資料の解題）。
- (49) 和歌山県立博物館二〇〇五、作品番号三八（熊野速玉大社伝来）、
- 作品番号一〇九（阿須賀神社伝来）。
- (50) 滝川政次郎ほか一九七一。
- (51) 京都国立博物館編『京都国立博物館蔵国宝阿須賀神社伝来古神宝』一九七二年、和歌山県立博物館二〇〇五。
- (52) 浅野長武ほか編『秘宝』九 講談社 一九六八年、作品番号一五一。図版により、二旒ともに桃色と白色の玉の連なりが確認できる。
- (53) 箱書に「玉佩式旒（明治）卅一年夏、修補其欠損、以淡紅及白色丸玉補足断之所、扨古図整綴之、敢不加私案也」とあったという（浅野長武ほか一九六八）。
- (54) 「錦包挿鞋」について、両社古神宝類の間で入れ違いが起きているとの指摘がある（和歌山県立博物館二〇〇五、作品番号六六）。
- (55) 和歌山県立博物館二〇〇五、作品番号五九。
- (56) 表地に緑、黄、薄紅の三色の色糸を用いて浮線綾文を織り出し、裏地は薄紅地鶴丸文、大きさは縦七尺二寸二分（約二一八・八cm）、横計二尺七寸（約八一・八cm）。
- (57) 和歌山県立博物館二〇〇五、作品番号五八。
- (58) 本品については、山川暁二〇一〇に詳しい。
- (59) 和歌山県立博物館二〇〇五、作品番号五九。
- (60) 和歌山県立博物館二〇〇五、山川暁二〇一〇など。

【表一】西尾文庫本記載の神宝一覧

- ・「番号」列には、便宜上各項目に振った番号を記す。巻号と、同一奉納先における掲載順を併記した。巻3については、1巻のうちに7つの社殿宛の神宝が含まれるので、巻号の次に社殿をあらわす1～7の番号を振り、その先に掲載順を記した。
- ・「項目名」列には、各項目の名称を、西尾文庫本の見出しに即して、名称と員数を基本として記した。項目の前に分類名が記される場合は太字で付記した。項目名の明記されないものは、現存する古神宝類などから判断して（ ）内に記した。
- ・「注記」列には、朱書注や残存の有無、損傷に関する注記のあるものについて記した。
- ・「相当しうる現存の古神宝類」列には、熊野速玉大社・阿須賀神社伝来の古神宝類の内から、本図の記録に相当しうるものを挙げ、指定名称と現所蔵の頭文字（速・阿）を付した。図内に欠失とあるが類品のあるものは（ ）内に記した。ただし、記録と古神宝類との同定にはさらなる裏付けが必要である。
- ・現存する古神宝類との比較検討に当たっては、和歌山県立博物館編『熊野速玉大社の名宝―新宮の歴史とともに―』（2005）、京都国立博物館編『京都国立博物館蔵阿須賀神社伝来古神宝類』（1972）、浅野長武ほか編『秘宝 第9巻』（講談社、1968）を参照した。

岩瀬文庫本 第一巻 西御前結霊宮			
番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝類
1-1	ハ	御神服 薄様襲御衣 五領	「柙 香立浦文固綾」【速】を含むカ
1-2		三重御表着 一領	
1-3		白御單 一領	「薄衣 白小葵文固綾」【速】
1-4		紅御張袴 一腰	「袴 紅地平絹 殘闕」【速】
1-5		御衾 一條	
1-6	テ	御薄裳 御薄様包帖	「紅帖紙」【速】
1-7	内一枚見エ不申候	此外 櫛 二枚	「蒔絵櫛（手箱内容品）」【速・阿】
1-8		鏡 一面	「白銅鏡」または「白銅鏡（手箱内容品）」【速・阿】
1-9		鬘 一懸	「義鬘」【速・阿】
1-10	見エ不申候	鉢銀 一具	「鉢銀（手箱内容品）」【速・阿】
1-11	見エ不申候	已上納袋	「赤地錦袋（手箱附）」【速】
1-12		御鏡 三面	「桐唐草双鶴文鏡」【速】
1-13		御鏡袋	「赤地錦袋（大型鏡附）」【速・阿】
1-14		糸花 三	「挿頭華」【速】
岩瀬文庫本 第二巻 下八所殿禪地御宮			
2-1		御神服 一具 襲御衣 三領	
2-2		御單衣 一領	「薄衣 萌黄幸菱文固綾」【速】
2-3		御薄衣 一領	
2-4		海賦御裳 一腰	「海賦裳 白小葵文固綾」【速・阿】
2-5	損在	紅御薄衣 一領	
2-6		御唐衣 一領	「唐衣 緯白小葵文固綾」【速】
2-7	闕失	御張袴 一腰	
2-8		御檜扇 一枚	「彩絵檜扇」【速・阿】
2-9	闕失	御平裏 一帖	
2-10		御調度 御手箱 一合	「唐花唐草蒔絵手箱」【速】
2-11		御托鉢	
2-12		御内張赤地大和錦	（手箱の内貼裂）
2-13		御手箱袋	「赤地錦袋（手箱附属品）」【速・阿】
2-14		御鏡篋 一合	「蒔絵鏡箱（手箱内容品）」【速・阿】
2-15	闕失	銀薫物篋 二合	「銀薫物箱（手箱内容品）」【速・阿】
2-16	闕失	銀白粉箱 二箇	「銀白粉箱（手箱内容品）」【速・阿】
2-17	闕失	銀歯黒箱 二合	「銀歯黒箱（手箱内容品）」【速・阿】
2-18	闕失	銀莖歯黒筆 一雙	「銀莖黒筆（手箱内容品）」【速・阿】
2-19		銀歯黒器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
2-20		銀抹摺器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
2-21		銀水入器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
2-22		銀髪掬大小 二箇	「銀髪掬（手箱内容品）」【速・阿】
2-23		銀耳掬 一箇	「銀耳掬（手箱内容品）」【速・阿】
2-24		銀鉢銀 □（一カ）具	「銀鉢（手箱内容品）」【速・阿】
2-25		銀針 三本	「銀縫針」【速】
2-26		銀解櫛 一枚	「銀解櫛（手箱内容品）」【速・阿】

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝類
2-27		梨地蒔繪櫛 廿九枚	「蒔繪櫛（手箱内容品）」【速・阿】
2-28		銀櫛拂 一箇	「銀櫛払（手箱内容品）」【速・阿】
2-29	損在	銀軸眉作 一雙	「銀眉作（手箱内容品）」【速・阿】
2-30		御拂 二帖	「紅帖紙」【速】
2-31		紅帖紙 一雙	「紅帖紙」【速】
2-32		茶碗移紅器 一箇	「白磁皿（手箱内容品）」【速・阿】
2-33	闕失	茶碗油器 一箇	
2-34	闕失	此外 櫛 二枚	（「蒔繪櫛（手箱内容品）」【速・阿】）
2-35	闕失	鏡 一面	（鏡のいづれか【速・阿】）
2-36		鬘 一掛	「義髻」【速・阿】
2-37	闕失	鈿釵 一具	（「銀鈿釵（手箱内容品）」【速・阿】）
2-38	見エ不申候	已上同前納錦袋入採色箱	（「赤地錦袋（手箱附）」【速】）
2-39		御目錄之外 御二幅ノ物 一	「袷 黄地浮線綾文唐織物」【速・阿】
2-40		御糸花	「挿頭華」【速】
2-41		紅筆ノ如キ物	
2-42		齒黒筆ノ如キ物	
2-43		（鏡）	「松楓双鶴文鏡」【速】
2-44		御鏡箱	「黒漆平文鏡箱（大型鏡附）」【速・阿】
岩瀬文庫本 第三卷 聖御宮(3-1)・児御宮(3-2)・子守御宮(3-3)・一万十万御宮(3-4)・勸請御宮(3-5)・飛行御宮(3-6)・米持御宮(3-7)			
3-1-1		御装束同 御神服同 御調度 御手箱 一合	「牡丹蒔絵手箱」【速】
3-1-2		御眉作 一雙	「銀眉作（手箱内容品）」【速・阿】
3-1-3	見エ不申候	御針	（「銀縫針」【速】）
3-1-4		御唐衣 一領	「唐衣 緯白小葵文固綾」【速】
3-1-5		御紅袴 一腰	「袴 紅地平絹 残闕」【速】
3-1-6		御檜扇 一枚	「彩絵檜扇」【速】
3-2-1		御手箱 一合	「唐花唐草蒔絵手箱」【速】
3-2-2		御白粉笥 一箇	「銀白粉箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-2-3		御薫物筥 一合	「銀薫物箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-2-4	見エ不申候	御針	（「銀縫針」【速】）
3-2-5		御鏡 一面	「白銅鏡（手箱内容品）」【速・阿】
3-2-6		海賦御裳 一腰	「海賦裳 白小葵文固綾」【速・阿】
3-2-7	見エ不申候	御單衣	
3-2-8		御紅袴 一腰	「袴 紅地平絹 残闕」【速】
3-3-1		御手箱 一合	「橘蒔絵手箱」【速・個】
3-3-2		御鏡 一面	「白銅鏡（手箱内容品）」【速・阿】
3-3-3		御薫物筥 一合	「銀薫物箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-3-4		御白粉笥 一箇	「銀白粉箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-3-5		御齒黒箱 一合	「銀齒黒箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-3-6	見エ不申候	御針	（「銀縫針」【速】）
3-3-7		御唐衣 一領	「唐衣 緯白小葵文固綾」【速】
3-3-8		紅御袴 一腰	「袴 紅地平絹 残闕」【速】
3-4-1		御手箱 一合	「菊唐草蒔絵手箱」【速】
3-4-2		御鏡箱 一合	「蒔絵鏡箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-4-3		紅御袴 一合	「袴 紅地平絹 残闕」【速】
3-5-1		御手箱 一合	「松楓蒔絵手箱」【阿】
3-5-2		御鏡 一面	「白銅鏡（手箱内容品）」【速・阿】
3-5-3	見エ不申候	御針	（「銀縫針」【速】）
3-5-4		海賦御裳 一腰	「海賦裳 白小葵文固綾」【速・阿】
3-6-1		御手箱 一合	「柳蒔絵手箱」【速】
3-6-2		御鏡箱 一合	「蒔絵鏡箱（手箱内容品）」【速・阿】
3-6-3		紅御袴 一腰	「袴 紅地平絹 残闕」【速】
3-6-4		御唐衣 一領	「唐衣 緯白小葵文固綾」【速】
3-7-1		御手箱 一合	「橘蒔絵手箱」【速・個】

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝類
3-7-2	見エ不申候	御針	〔「銀縫針」【速】〕
3-7-3		紅御袴 一腰	〔袴 紅地平絹 殘闕〕【速】
3-7-4		海賦御裳 一腰	〔海賦裳 白小葵文固綾〕【速・阿】
3-7-5		御薄衣 一領	〔裵 蘇芳小花文銀欄〕【速】
3-7-6		御唐衣 一領	〔唐衣 蘇芳蓮唐草文銀欄〕【速】
3-7-7		御二幅ノ物 一	〔衾 朽葉人物花唐草文繡珍〕【速】
岩瀬文庫本 第四卷 (証誠殿)			
4-1		御大口 一腰	
4-2		御袍 二領	〔裵 経緯緯白小葵文固綾〕【速】
4-3		御單 一領	〔薄衣 白地遠菱紋固綾〕【速】
4-4	ヤ	御薄衣 一領	〔薄衣 淡紅地幸菱紋固綾〕【速】
4-5	闕失	御帶 一條	
4-6	闕失	御狩衣 一領	
4-7	闕失	御衾 一條	
4-8	フ	御檜扇 一枚	〔彩絵檜扇〕【速・阿】
4-9	闕失	御履 一両	
4-10		御草鞋 一両	〔錦包挿鞋〕【速・阿】
4-11		御草鞋箱	〔唐花蒔絵挿鞋箱〕【速・阿】
4-12	闕失	御入帷 一條	
4-13	闕失	御平裏 一帖	
4-14	闕失	御衣箱 一合	〔「松喰鶴蒔絵御衣箱」【速・阿】カ〕
4-15		御調度 御手箱 一合	〔桐蒔絵手箱〕【速】
4-16		御托鉢	
4-17		御手箱之袋	〔赤地錦袋（手箱附属品）〕【速・阿】
4-18		御鏡箱 一合	〔蒔絵鏡箱（手箱内容品）〕【速・阿】
4-19		御鏡	〔白銅鏡（手箱内容品）〕【速・阿】
4-20		銀薫物箱 二箇	〔銀薫物箱（手箱内容品）〕【速・阿】
4-21		銀齒黒箱 二箇	〔銀齒黒箱（手箱内容品）〕【速・阿】
4-22		銀莖齒黒筆 一雙	〔銀齒黒筆（手箱内容品）〕【速・阿】
4-23		銀齒黒器 一箇	〔銀菊花形皿（手箱内容品）〕【速・阿】
4-24		銀抹裾器 一箇	〔銀菊花形皿（手箱内容品）〕【速・阿】
4-25		銀水入器 一箇	〔銀菊花形皿（手箱内容品）〕【速・阿】
4-26		銀髮撓大小 二箇	〔銀髮撓（手箱内容品）〕【速・阿】
4-27		銀耳撓 一箇	〔銀耳撓（手箱内容品）〕【速・阿】
4-28		銀白粉筒 二箇	〔銀白粉箱（手箱内容品）〕【速・阿】
4-29		銀軸眉作 一雙	〔銀眉作（手箱内容品）〕【速・阿】
4-30		紅帖紙 一双	〔紅帖紙〕【速】
4-31		銀鉢銀 一具	〔銀鉢銀（手箱内容品）〕【速・阿】
4-32	内二本ハ見エ不申候	銀針 三本	〔銀縫針〕【速】
4-33		銀櫛拂 一箇	〔銀櫛払（手箱内容品）〕【速・阿】
4-34		銀解櫛 一枚	〔銀解櫛（手箱内容品）〕【速・阿】
4-35		溶掛地蒔絵櫛 廿九枚	〔蒔絵櫛（手箱内容品）〕【速・阿】
4-36		御拂 二帖	〔紅帖紙〕【速】
4-37	闕失	茶碗油壺 一箇	
4-38		茶碗紅移器 一箇	〔白磁皿（手箱内容品）〕【速・阿】
4-39		色々薄様 三襲	〔紅帖紙〕【速】のうちカ
4-40		(鏡箱)	〔黒漆平文鏡箱（大型鏡附）〕【速・阿】
4-41		御目録之外 御櫛箱 一合	〔蒔絵櫛箱（手箱内容品）〕【速・阿】
4-42		御鏡箱袋 三	〔黒漆平文鏡箱（大型鏡附）〕【速・阿】
岩瀬文庫本 第五卷 飛鳥荒祭宮			
5-1	損在	御束帶 一具 御冠 一頭	〔冠〕【速・阿】
5-2		御袍 一領	
5-3		御直衣 一領	〔袍 白地小葵文固綾〕【阿】

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝類
5-4	闕失	御半臂 [*] 一領	
5-5	闕失	御下襲 一領	
5-6		御粕 一領	
5-7		御單衣 一領	
5-8	甚損シ	紅張大口 一領	「袴 紅地平絹 殘闕」【速】
5-9		御表袴 一腰	「表袴 緯白窠霞文二重織」【阿】
5-10		石御帶 一條	「石帶」【阿】
5-11		御笏 一枚	「木笏」【速・阿】
5-12		御衾 一條	
5-13		御檜扇 一枚	「彩絵檜扇」【阿】
5-14		御履 一両	「錦包挿鞋」【速・阿】
5-15		御平裏 一帖	
5-16		御入帷 一帖	
5-17	闕失	御衣篋 一合	(「松喰鶴蒔絵御衣箱」【速・阿】カ)
5-18		御調度 御手箱 一合	「籬菊蒔絵手箱」【速】
5-19		御鏡箱 一合	「白銅鏡 (手箱内容品)」【速・阿】
5-20		銀薫物箱 二箇	「銀薫物箱 (手箱内容品)」【速・阿】
5-21		銀白粉箱 二箇	「銀白粉箱 (手箱内容品)」【速・阿】
5-22		銀齒黒箱 二合	「銀齒黒箱 (手箱内容品)」【速・阿】
5-23	見エ不申候	銀莖齒黒筆 一雙	(「銀齒黒筆 (手箱内容品)」【速・阿】)
5-24		銀齒黒器 一箇	「銀菊花形皿 (手箱内容品)」【速・阿】
5-25		銀抹摺器 一箇	「銀菊花形皿 (手箱内容品)」【速・阿】
5-26		銀水入器 一箇	「銀菊花形皿 (手箱内容品)」【速・阿】
5-27		銀髮搔大小 二箇	「銀髮搔 (手箱内容品)」【速・阿】
5-28		銀耳搔 一箇	「銀耳搔 (手箱内容品)」【速・阿】
5-29		銀鈇鉞 一具	「銀鈇鉞 (手箱内容品)」【速・阿】
5-30	見エ不申候	銀針 三本	(「銀縫針」【速】)
5-31		銀解櫛 一枚	「銀解櫛 (手箱内容品)」【速・阿】
5-32		浴掛地蒔繪櫛 廿九枚	「蒔絵櫛 (手箱内容品)」【速・阿】
5-33		銀櫛拂 一箇	「銀櫛払 (手箱内容品)」【速・阿】
5-34		御拂 二帖	「紅帖紙」【速】
5-35		紅帖紙 一雙	「紅帖紙」【速】
5-36		銀軸眉作 一雙	「銀眉作 (手箱内容品)」【速・阿】
5-37		色々薄様 三襲	「紅帖紙」【速】のうちカ
5-38		茶碗紅移器 一箇	「白磁皿 (手箱内容品)」【速・阿】
5-39	闕失	茶碗油壺 一箇	
5-40	闕失	此外 櫛 二枚	(「蒔絵櫛 (手箱内容品)」【速・阿】)
5-41		鏡 一面	「白銅鏡」または「白銅鏡 (手箱内容品)」【速・阿】
5-42		髷 一掛	「義髷」【速・阿】
5-43	闕失	鈇鉞 一具	(「銀鈇鉞 (手箱内容品)」【速・阿】)
5-44	見エ不申候	已上色目同前納錦袋	(「赤地錦袋 (手箱附)」【速・阿】)
5-45		御鏡 一面	「松竹双鶴文鏡」【速・阿】
岩瀬文庫本 第六卷 若宮殿			
6-1	ハ	御神服 一具 薄様襲御衣 五領	「裃 香立涌文固綾」【速】を含むカ
6-2		御薄衣 一領	「裃 萌黄小葵浮線綾丸文二重織」【速】
6-3		御單衣 一領	「薄衣 白小葵文固綾」【速】
6-4		御唐衣 一領	「唐衣 萌黄小葵文固綾」【速】
6-5		地摺御裳 一腰	「海賦裳 白小葵文固綾」【速・阿】
6-6		紅御二重衣 一領	
6-7	ム	二重織袴 一腰	
6-8		御檜扇 一枚	「彩絵檜扇」【速・阿】
6-9		御平裏 一帖	
6-10		御調度 御手箱 一合	「松椿蒔絵手箱」【阿】

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝類
6-11		御鏡箱 一合	「蒔絵鏡箱（手箱内容品）」【速・阿】
6-12		銀薫物筥 二合	「銀薫物箱（手箱内容品）」【速・阿】
6-13		銀白粉筒 二箇	「銀白粉箱（手箱内容品）」【速・阿】
6-14		銀歯黒箱 二合	「銀歯黒箱（手箱内容品）」【速・阿】
6-15	見エ不申候	銀莖歯黒筆 一雙	（「銀歯黒筆（手箱内容品）」【速・阿】）
6-16		銀歯黒器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
6-17		銀抹裙器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
6-18		銀水入器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
6-19		銀髪撓大小 一箇	「銀髪撓（手箱内容品）」【速・阿】
6-20		銀耳撓 一箇	「銀耳撓（手箱内容品）」【速・阿】
6-21		銀鉢鍔 一具	「銀鉢鍔（手箱内容品）」【速・阿】
6-22	見エ不申候	銀針 三本	（「銀縫針」【速】）
6-23		銀解櫛 一枚	「銀解櫛（手箱内容品）」【速・阿】
6-24		溶掛地蒔絵櫛 廿九枚	「蒔絵櫛（手箱内容品）」【速・阿】
6-25		銀櫛拂 一箇	「銀櫛払（手箱内容品）」【速・阿】
6-26		御拂 二帖	「紅帖紙」【速】
6-27		銀軸眉作 一雙	「銀眉作（手箱内容品）」【速・阿】
6-28		紅帖紙 一双	「紅帖紙」【速】
6-29		茶碗紅移器 一箇	「白磁皿（手箱内容品）」【速・阿】
6-30		色々薄様 三襲	「紅帖紙」【速】のうちカ
6-31	闕失	茶碗油壺 一箇	
6-32		此外 櫛 二枚	「蒔絵櫛（手箱内容品）」【速・阿】
6-33		鏡 一面	「白銅鏡」または「白銅鏡（手箱内容品）」【速・阿】
6-34		髷 一懸	「義髷」【速・阿】
6-35	見エ不申候	鉢鍔 一具	（「銀鉢鍔（手箱内容品）」【速・阿】）
6-36	見エ不申候	已上色目同前納錦袋入採無検納箱	（「赤地錦袋（手箱内容品）」【速・阿】）
6-37		御鏡 一面	鏡のいずれか【速・阿】
6-38		御苧筒 一合	「松鶴蒔絵苧筒」【速】
6-39		御苧巻 一箇	「金銅縛」【速】
6-40		御多々利 一基	
6-41		御袴 一枚	「松喰鶴蒔絵袴」【速・阿】
6-42		御目録之外 御櫛箱 一合	「蒔絵櫛箱（手箱内容品）」【速・阿】
6-43		御糸花 一	「挿頭華」【速】

【表三】 ベルリン本記載の神宝一覧

表記のルール等については【表一】の凡例に従った。ただし、各神宝の番号は「B-○」と標記した。

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝
ベルリン本 中御前速靈宮			
B-1	井	御鉾 二柄	「鉄鉾」【速】
B-2		（鳥頭太刀）	「金銀装鳥頭太刀」【速】
B-3		御劔袋	「赤地錦袋（金銀装鳥頭太刀附）」【速】
B-4		御平緒	「平緒残欠」【速】
B-5		御弓 二張	「朱塗弓」【速】
B-6		御弓袋	「赤地錦袋（朱塗弓附）」【速】
B-7	闕失	蒔絵鞆 一枚	
B-8		御平胡籙 二具	「桐文蒔絵平胡籙」・「金銅箭」・「金銅鎗矢」【速】
B-9	闕失	御馬具 銀面 一箇	
B-10	闕失	髪袋 一箇	
B-11	闕失	尾袋 一箇	
B-12	闕失	雲形	
B-13	闕失	雲珠	
B-14	闕失	牽轡	

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝
B-15	ク	御唐鞍 皆具	「金銅装唐鞍」【速】
B-16	損	小轡	
B-17	損	大轡	
B-18	闕失	表敷	
B-19		鞆	
B-20		鐙 一具	「金銅壺鐙」【速】
B-21		朱塗鞆 一具	「金銅杏葉」【速】
B-22		御日録之外 御轡	
B-23	闕失	鞆	
B-24	闕失	表腹帯	
B-25	闕失	餉付 十筋	
B-26	闕失	差繩 四筋	
B-27		御鞭 一筋	「朱塗鞭」【速】
B-28	闕失	御錦蓋 一柄	
B-29		御神服 二具 一具 薄様襲御衣 五領	
B-30		黄二重織物御表着 一領	
B-31		緑御單 一領	
B-32		(唐鞍)	「金銅装唐鞍」【速】
B-33	闕失	御狩衣 一領	
B-34		紫御指貫 一腰	
B-35		錦御衾 一條	
B-36	損在	紅御帶 一條	
B-37		御履 一兩	「錦包挿鞋」【速・阿】
B-38	闕失	御平裏 一帖	
B-39		御入帷 一條	
B-40	闕失	御衣箱 一合	(「松喰鶴蒔絵御衣箱」【速・阿】カ)
B-41	損	御束帶 一具 御冠 一頭	「冠」【速・阿】
B-42	ケ	御冠箱	「松喰鶴蒔絵冠箱」【速・阿】
B-43		御冠箱袋	
B-44	損シ御座候	玉珮 二流	「玉珮」【速】
B-45		玉珮箱	「椰蒔絵笏箱」【速】
B-46		御袍 一領	「袍 萌黄浮線綾丸文固綾」【速】
B-47		御直衣 一領	
B-48		御半臂 一領	
B-49	見エ不申候	御下襲 一領	
B-50		紅御柏 一領	
B-51		御單衣 一領	
B-52	損	御大口 一腰	
B-53	損	御表袴 一腰	
B-54	損	御石帯 一條	「石帯」【阿】カ
B-55		御石帯袋	「赤地錦袋(石帯附属)」【阿】カ
B-56		御履 一兩	「錦包挿鞋」【速・阿】カ
B-57		御笏 一枚	「木笏」【速・阿】
B-58		御笏箱	「桐蒔絵玉珮箱」【速】
B-59		御檜扇 一枚	「彩絵檜扇」【速・阿】
B-60	闕失	御平裏 一帖	
B-61		御入帷 一條	「衾 白小葵臥蝶丸文二重織」【阿】カ
B-62	闕失	御衣箱 一合	(「松喰鶴蒔絵御衣箱」【速・阿】カ)
B-63		増進 本日録外 蒲萄色御衣 一領	
B-64		紅御單衣 一領	
B-65	損	涅槃御袴 一腰	
B-66		御調度 御手箱 一合	「桐唐草蒔絵手箱」【速】
B-67		御鏡箱 一合	「蒔絵鏡箱(手箱内容品)」【速・阿】

番号	注記	項目名	相当しうる現存の古神宝
B-68		火取玉 一顆	「水晶玉」【速】
B-69		水取玉 一顆	「水晶玉」【速】
B-70		銀薫物筥 二合	「銀薫物箱（手箱内容品）」【速・阿】
B-71		銀白粉筥 二箇	「銀菌黒箱（手箱内容品）」【速・阿】
B-72		銀菌黒筥 二合	「銀菌黒箱（手箱内容品）」【速・阿】
B-73		銀莖菌黒筆 一雙	「銀菌黒筆（手箱内容品）」【速・阿】
B-74		銀菌黒器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
B-75		銀抹摺器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
B-76		銀水入器 一箇	「銀菊花形皿（手箱内容品）」【速・阿】
B-77		銀髮搔大小 二箇	「銀髮搔（手箱内容品）」【速・阿】
B-78		銀耳撥 一箇	「銀耳搔（手箱内容品）」【速・阿】
B-79		銀鉢鉦 一具	「銀鉢鉦（手箱内容品）」【速・阿】
B-80		銀軸眉作 一雙	「銀眉作（手箱内容品）」【速・阿】
B-81		紅帖紙 一雙	「紅帖紙」【速】
B-82		銀解櫛 一枚	「銀解櫛（手箱内容品）」【速・阿】
B-83		沃懸地蒔絵櫛 廿九枚	「蒔絵櫛（手箱内容品）」【速・阿】
B-84		銀櫛拂 一箇	「銀櫛払（手箱内容品）」【速・阿】
B-85		御拂 二帖	「紅帖紙」【速】
B-86		銀針 三本	「銀縫針」【速】
B-87		色々薄様 三襲	「紅帖紙」【速】のうちか
B-88	闕失	茶碗油壺 一箇	
B-89		茶碗移紅器 一箇	「白磁皿（手箱内容品）」【速・阿】
B-90		此外 櫛 二枚	「蒔絵櫛（手箱内容品）」【速・阿】
B-91		鏡 一面	鏡のいずれか【速・阿】
B-92		髷 一掛	「義髷」【速・阿】
B-93	見エ不申候	鉢鉦 一具	「銀鉢鉦（手箱内容品）」【速・阿】
B-94	見エ不申候	已上納袋	「赤地錦袋（手箱内容品）」【速・阿】
B-95		御鏡 二面	「櫛及鶴文鏡」と「桐唐草及鶴文鏡」【速】
B-96		御鏡箱	「黒漆平文鏡箱（大型鏡附）」【速・阿】
B-97		御硯箱 一合	「桐蒔絵硯箱」【速】
B-98	闕失	墨 一疋	
B-99		瓦硯 一面	「硯（桐蒔絵硯箱内容品）」【速】
B-100		筆 三管	「筆（桐蒔絵硯箱内容品）」【速】
B-101		筆台	「筆台（桐蒔絵硯箱内容品）」【速】
B-102		小刀 一柄	「刀子（桐蒔絵硯箱内容品）」【速】
B-103		金銀水瓶 一口	「水滴（桐蒔絵硯箱内容品）」【速】
B-104		御目録之外 御錐 一	「錐（桐蒔絵硯箱内容品）」【速】
B-105		御墨挟ノ如キ物 一	
B-106		御硯箱包服紗 一	
B-107		童元結ノ如キ物 七	
B-108		菌黒筆ノ如キ物 一雙	
B-109		御鏡三箱入外箱 一合	
B-110		御糸花	「挿頭華」【速】
B-111		御蓋 一柄	
B-112		織物一幅ノ物 一	

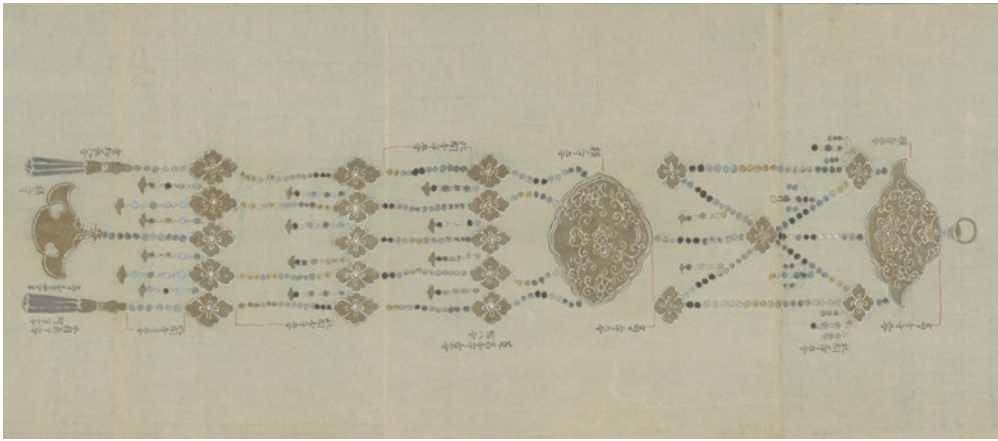
〈卷末図版〉



卷末図一 「御手箱」図（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第四巻のうち）



卷末図三 「御二幅ノ物」(西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第二巻のうち)



卷末図二 「玉珮」図（ベルリン国立図書館所蔵「中御前速靈宮（仮題）」のうち）



卷末図五 「御薄衣」
（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第三巻のうち）



卷末図四 「御唐衣」
（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第三巻のうち）



卷末図六 「御二幅ノ物」図（西尾市岩瀬文庫所蔵「有職図」第三巻のうち）